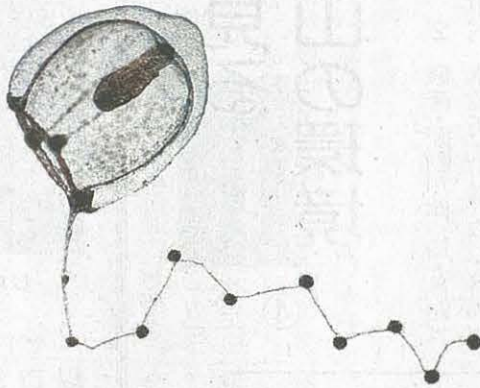


カタアシクラゲモドキ



1本の触手しかないカタアシクラゲモドキ (河村真理子博士撮影)

カタアシクラゲモドキは、1本だけ長く伸びる触手しか持っていない変わり者のヒドロクラゲである。一見、アンバランスな容姿で傷ついているのかなと思ってしまう。

久保田 信

69



カタアシクラゲに類似するが、触手に点々と並ぶ刺胞の塊が数珠状となっているので両者は簡単に区別できる。画像は若い個体で10個の刺胞動塊が並んでおり、この数は成長とともに増える。

傘の高さは4ミ以下で、とても小さい。傘の中心にあるのが胃腔だが、口先に唇や触手など全くなくて、丸くてつるつるしている。餌は通常、アルテミアという甲殻類を与えて飼育する。ふ化したのごく小さなアルテミアを、針先で小さな肉片に引き裂いて与えてもなかなか食べてくれない。飼育がとても難しいクラゲである。

傘の頂にはゼラチン質のちよつとした突起が見られる。この中にへそ

の緒のような管がポリプから遊離したところにあるが、この個体はもう残っていない。放射管は4本あり、十字状に内傘を走っていて、消化循環の役割を果たす。光を感じる眼点は持たない。口の周囲や触手の基部の膨らみ、傘縁にある小さな瘤(りゅう)の中心部、そして傘縁自体は紅色で美しい。

日本各地の沿岸で幼クラゲが普通に採取できるが、成熟個体は発見が難しい。生殖巣は円筒状の胃腔を取り巻くように形成される。わが国の他、インドー西太平洋、大西洋、地中海など世界に広く分布する。

ポリプはわが国の屋外からの報告はまれで、筆者は大学院時代に人工的に得ている。ポリプは外国産のと同じ形で、海底の砂泥の中からすくっと伸び上がる単体性の比較的大形のものである。このポリプのヒドロ花にある長い縁触手のすぐ上方に、多数のクラゲ芽が形成される。

(京都大学准教授)